平成２５年度
創生授業実施報告書

愛媛大学　教育・学生支援機構

共通教育センター

目　次

前学期

１０６１９　歴史を考える
寺内　浩（法文学部人文学科）・・・・・・・・・・・・・・・　１

１０６９４　生命の不思議
上野　秀人（農学部）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３

１０６１３　環境を考える
大田　伊久雄（農学部）・・・・・・・・・・・・・・・・・・　６

１０６１４　環境を考える
中川　祐治（総合情報メディアセンター）・・・・・・・・・　８

後学期

２０６２４　地域と世界
ルードルフ・ライネルト（教育学生支援機構）・・・・・・１０

２０６２５　地域と世界
田中　寿郎（大学院理工学研究科）・・・・・・・・・・・・１３

科目番号：１０６１９	科目名：歴史を考える
担当教員：寺内　浩	
開講時期：前期　木曜２限　履修者数：３０名	

共通教育「創生授業」実施報告書

代表教員　所属　法文学部
氏名　　寺内　浩

1. 授業データ

開講時期　：平成　25 年度　　前学期
時間割番号：10619
科目名　　：歴史を考える
授業題目　：四国遍路を学び、歩き、考える
履修者数　：30 名

2. 授業の目的

四国遍路、とりわけ「歩き遍路」がブームになっている。しかし、四国遍路がいつごろから始まり、どのように変化してきたかを知っている人は少ない。この授業の目的の一つめは、こうした四国遍路の歴史を学ぶことである。二つめの目的は、実際に遍路道を歩くことにより、「歩き遍路」の意味を考えることである。交通手段が発達しているにもかかわらず、歩いて札所を巡る人が増えている。その理由を、実際に「歩き遍路」を体験することにより、考えてもらいたい。

3. 授業の到達目標

(1)四国遍路の歴史を知る。
(2)物事に対して前向きな姿勢をとることができる。
(3)「歩き遍路」の意味を説明できる。

4. 共通教育の理念・教育方針に関わる項目（対応する項目をチェックして下さい）

☑基本姿勢　☑コミュニケーション力　□基本技能　□基礎知識　□基礎的思考力

5. 授業概要

授業は講義と実習を組み合わせて進めた。現地実習Ⅰ・Ⅱ（「歩き遍路」）は 6 月 8 日(土)、9 日(日）に実施し、2 日間で約 40 ㎞（三坂峠～大学正門前、今治市の南光坊～国分寺）を歩いた。

6. 授業の進め方と特に留意した事柄

講義を 9 回行い、四国遍路に関する知識が取得できるようにした。また、ウォーキング実習を 2 回実施し、現地実習に備えた。二日間に及ぶ現地実習では、支援学生や伴走車を配置し、学生が目的地まで無事歩けるようつとめた。

7. 学生の反応

最終授業時に、この授業で得たものはなにか、をアンケート調査した（成績評価対象者 26 名中 26 名が回答）。設問 1、「今回の授業でなにか得るものがありましたか」については、「大いに得るものがあった」が 18 名、「得るものがあった」が 8 名、「あまり得るものはなかった」と「全く得るものはなかった」は 0 名であった。また、設問 2、「今回の授業で得たものは何ですか（複数回答可）」については、①「知識」が 21 名、②「体力・健康についての認識」が 8 名、③「チャレンジ力」が 11 名、④「忍耐力」が 15 名、⑤「コミュニケーション力」が 8 名、⑥「新たな人生観」が 9 名、⑦「その他」が 1 名であった。

この他、自由回答欄に以下のような記述があった。

・実習による達成感や人生観を得られてよかった
・座学で学ぶだけでなく、実地でも遍路について学ぶことができた
・班の人達と交流を深め仲良くなることができた
・大学外の人と多く交流できたことがよかった
・お接待で四国のあたたかさを知った
・実際に歩くことで遍路にたいする興味がわいた
・実際に歩くことでしかわからない四国遍路のたいへんさがわかった
・大学生活でいろんなことに挑戦したいと思えるようになった

8. 到達目標の達成状況

上記のアンケート調査の結果、及び授業終了後に提出したレポートの内容などからみて、到達目標は十分達成していると考えられる。

9. 今後に向けた展開

アンケート調査の結果やレポートの内容を詳細に分析し、今後の授業に役立てたい。

10. その他（関連資料など）

平成 25 年度共通教育科目歴史の多様性「遍路を学び、歩き、考える」受講生レポート集

科目番号：１０６９４	科目名：生命の不思議
担当教員：上野　秀人	
開講時期：前期　集中	履修者数：２６名

共通教育「創生授業」実施報告書

代表教員　所属　　農学部
氏名　　上野　秀人

1. 授業データ

開講時期　：平成２５年度　前学期　集中
時間割番号：１０６９４
科目名　　：生命の不思議
授業題目　：農に親しむ
履修者数　：２６名

2. 授業の目的

１．農学部以外の学生に、農業体験を通じて、「農業とはどのようなものか」を感じ取ってもらう。
２．農業は単に食糧生産に重要な役割を巣たしているばかりでなく、保水機能、災害防止、景観保全、生物多様性等、数多くの「多面的な機能」があることを知り、「農業と自然環境の関わり」を理解することにより、「フィールドサイエンスの基礎知識」を得る。
３．土に触れ、農作業を行い、「生命を生み出し、養う」体験を通じて、「農の重要性」を５感で理解し、農に親しむことができるようになることを目的としている。

3. 授業の到達目標

１．農作集体験を行うことで「農業」や「自然」を５感で感じることができる。
２．「農業」という産業の論理と技術進歩を見聞きすることで、「農業」の重要性が理解できる。
３．フィールドサイエンスの講義を受け、環境保全型農業の現場で実習することにより、「農業」と「環境」の関わりが理解できる。

4. 共通教育の理念・教育方針に関わる項目（対応する項目をチェックして下さい）

■基本姿勢　□コミュニケーション力　■基本技能　■基礎知識　□基礎的思考力

5. 授業概要

農学部附属農場で夏期休業中(9 月中下旬)に 2 泊 3 日で集中的に行う授業である。昼間は５名の教員が半日ずつ担当し交代して行う。技術職員６名も実習補助を行う。１日目の夕方には、食品加工の一つとして餅つきも行う。実習は、基本的に内容説明と諸注意をし、実習の意義づけを行ってから、水田、果樹園、畑、家畜舎など、フィールドでの実習を実施する。さらに、夜間は 2 名の教員が ９０分間、『私の研究と農業生産』と題した授業を行う。

実習内容は、天候や作物生育ステージにより変更することもあるが、概ね、水稲生育調査、柑橘園管理、柑橘品質測定、野菜収穫や出荷調整、除草管理作業、肉牛の体格・体重測定、肉牛のブラッシングや畜舎整理、自然観察（動植物）、土壌の観察や簡易分析等を行っている。

6. 授業の進め方と特に留意した事柄

・農学部以外の学生が対象であるため、わかりやすく、興味深い説明をするように留意している。
・本授業は、農学部の教員６～７名、技術職員６名、臨時職員１名が２４時 間体制で実習を行うものであり、関連分野の教職員が総力を挙げて本授業に取り組んでいる。
・実習内容は、水稲、畑作、園芸、果樹、畜産、自然観察など幅広い内容になるように講師を設定しており、日本農業の各分野について触れられるように留意している。
・附属農場では「農学部環境保全型農業プロジェクト」が行われており、化学肥料や農薬による環境汚染を低減し、生態系を維持改善する取り組みについても説明を行い、学生に「自然保護」に対する取り組みの重要性を理解してもらうように留意している。

7. 学生の反応

・毎年、本授業は学生からの人気が非常に高く、申し込み受付には列ができ、即日のうちに受講者が決まってしまうほどである。そのため今年は抽選とし、学部が偏らないようにした。
・実習後のレポートから、学生による評価も非常に高いことがわかる。レポートのほとんどは、「他授業では学べない多くのことを学んだ。」、「農業の重要性を理解した」、「自然と親しむことができた」と書かれており、学習 効果が非常に高いと考えられる。教員からも、本授業の受講学生は農学部学生よりも積極的に 実習に取り組んでいるという意見が出された。

8. 到達目標の達成状況

１．ほとんどの受講学生は、都市部に居住し、「農業」はもちろんのこと、「自然」を５感で意識的に感じる機会がないため、新鮮な発見が多いことをレポートで述べており、目標は達成された。
２．「農業体験がない」、「実家が農業をしていても深く考えたことがない」学生がほとんどであり、産業としての農業がどのように実際行われているかを体験し、「農業者の苦労」、「農業は生命を生み出し、生命を養う」ことを改めて認識し、「農業の重要性」を感じ取っており、目標は達成された。
３．マメ科植物を使った無肥料栽培、生態系を活用した無農薬栽培技術を用いた作物栽培技術について理論を学び、現場を見ることにより、「農業」が「環境」に与える影響の大きさと「環境保全」の重要性を学んでおり、目標は達成された。

9. 今後に向けた展開

・農学部以外の学生は、附属農場を利用して卒業研究や修士、博士論文を行うことはほとんどない。そのため、本授業を受講した学生には、研究材料として農場が利用可能であることを説明し、施設の有効利用に向けた発信する。
・昨年度は、予算のほとんどをバスの借り上げ代として使用したが、今年度は往路に城北地区のマイクロバスを用いて運転手のみの費用で送迎が可能となった。復路は農学部のバスを使用したので予算を使

用しなかった。毎年、このように経費を削減できれば、実習で必要な 2 万円程度の消耗品（植物栽培用具、軍手、長靴など）だけで実習は行えるようになると考えられる。

10. その他（関連資料など）

特になし。

科目番号：１０６１３	科目名：環境を考える
担当教員：大田　伊久雄	
開講時期：前期　集中	履修者数：２０名

共通教育「創生授業」実施報告書

代表教員　所属　　農学部・森林資源学コース
氏名　　大田　伊久雄

1. 授業データ

開講時期　：平成 25 年度　前学期
時間割番号：１０６１３
科目名　　：環境を考える
授業題目　：日本の森から世界の森へ　―持続可能な森林・林業そして社会とは―
履修者数　：２０名

2. 授業の目的

森林の効用は大別すると，地球環境改善機能，地球環境保全機能，地域環境保全・改善機能，人間性回復機能等に分けられる。21 世紀の資源・環境問題を考えると，森林・木材の位置づけは新たなものとなる。特に，二酸化炭素吸収固定性や石油代替性，人間性回復等の機能が重要視されるようになってきた。もっとも，森林はこれらの機能を個別に持つのではなく，併せ持っていることを認識することが大切である。この授業では，これら森林の多くの機能を演習林における野外活動を通して理解し，日本そして世界規模の資源・環境問題の解決策を追求することを目的としている。

3. 授業の到達目標

- 日本および世界の森林の現状と課題について理解することができる。
- 森林踏査を通して，森林のもつ多様性について調べ，理解することができる。
- 林業施業を通して，森林管理の重要性を知る。
- 林内での作業を通して，仕事の道具を使えるようになる。
- 森林・資源を維持・収穫するのに必要な労力を自ら経験し理解することができる。
- 共同生活を送る上でのルールを体得することができる。
- グループワークを通してコミュニケーションのスキルを身につけることができる。

4. 共通教育の理念・教育方針に関わる項目（対応する項目をチェックして下さい）

□基本姿勢　■コミュニケーション力　■基本技能　■基礎知識　■基礎的思考力

5. 授業概要

履修者はグループに分かれ，森林・林業体験をとおしてトピックに関連した講義と実習に参加する。まず農学部附属演習林実験林内の踏査を行い，人工林と天然生林の相違，森林植物等の生物多様性につい

ての観察と地図読みスキルの獲得を行う。その後、同実験林内にて，人工林の保育に必要不可欠な森林施業（枝打ち・間伐）を体験し，人工林の維持管理に必要な技術を体得する。最終日には実習中に体験した事柄と，日本および世界の森林の現状について講義から得た知識をベースに，各グループに与えられる森林問題をテーマにした課題についてその問題の解決方法についてグループワークを行い，その成果の発表とその結果を受けたディベートを実施する。

6. 授業の進め方と特に留意した事柄

農学部附属演習林に泊まり込んでの 2 泊 3 日の集中講義であり，昼間は森林踏査や森林施業，夜は講義とグループ学習というかなりハードなスケジュールとなっている。夏の森林内にはマムシやスズメバチなど危険な動物も多く，また学生達が日常生活ではあまり体験しないような急峻な斜面を登る場面も少なくない。この授業では，まず初めにそうした危険に対して自ら五感を使って察知し回避する心構えを教える。野外活動中は，教員・技術職員・TA の連携を密にしつつ，体力的に厳しそうな学生には十分なサポートをするよう心がけた。

講義では，全体を 4 つのグループに分けた上でそれぞれに課題を与え，ディスカッションを通して自分達で考えることに重点を置いた。初日および 2 日目の夜を準備期間として，最終日にはグループ対抗のディベートを行い，学習成果の可視化を試みた。

さらに，講義終了後 3 週間後までにレポートの提出を義務付け，授業で体験し学んだ森林・林業に関する知識を再確認する機会を与えた。

7. 学生の反応

集中講義は夏休み期間中に行われるが、6 月のガイダンスでこの授業の厳しさについては十分説明をしている。それゆえ、林間学校的な軽いのりで受講する学生はいなかったはずが、それでも実習が肉体的にきつかったという意見は多かった。ただ、最終日のディベートは皆かなり真剣に取り組んでおり、他学部学生の自分とは違った考え方に触れられた点や，他人と協力し合いながら主張をまとめ上げていくプロセスなどに対してよい経験になったと答える学生がほとんどであった。

8. 到達目標の達成状況

3 日間の集中講義で，到達目標に掲げたすべてが容易に達成できるはずはないが，学生達の意識の変化には大きなものがあり，特に 1 回生の受講が多いことを考えると今後の大学生活の中で生かしていけるヒントになるものを得ることができたのではないか。具体的には，森林管理技術の重要性，世界の森林問題への視点，人と自然との関係性，グループでのコミュニケーションの方法などである。

9. 今後に向けた展開

夏休み期間が短縮されたことで農学部の 1 回生実習の日程が立て込んできており、この実習の日程を採ることが厳しくなっている。学生からの存続を望む声はあるが、教員・技術職員の負担も大きく、今後どのような形で展開していくのか熟考する必要がある。

10. その他（関連資料など）

科目番号：１０６１４	科目名：環境を考える
担当教員：中川　祐治	
開講時期：前期　集中	履修者数：１７名

共通教育「創生授業」実施報告書

代表教員　所属　総合情報メディアセンター
氏名　中川祐治

1. 授業データ

開講時期　：平成２５年度　前学期（集中）
時間割番号：１０６１４
科目名　　：環境を考える
授業題目　：シェアリングネイチャー
履修者数　：１７名

2. 授業の目的

環境教育の一分野である自然認識学の立場から、五感を使って自然を直接体験することで自然を共に分かち合うことを学ぶ。

3. 授業の到達目標

（1）ネイチャーゲームの目的を説明することができる。
（2）自然を直接体験する活動に参加することができる。
（3）新しいアクティビティを創作し実施することができる。

4. 共通教育の理念・教育方針に関わる項目（対応する項目をチェックして下さい）

□基本姿勢　■コミュニケーション力　□基本技能　■基礎知識　□基礎的思考力

5. 授業概要

ネイチャーゲームは、1979 年米国のナチュラリスト、ジョセフ・コーネル氏により発表された五感を使って自然を直接体験するプログラム（野外活動）である。ネイチャーゲームの目的は「自然への気づき（Nature Awareness)」で、「自然への気づき」とは五感で自然を感じ、体と心で直接自然を体験することによって、自然と自分が一体であることに気づくことである。授業では、ネイチャーゲームのアクティビティを屋外で実際に体験するとともに、理論的背景を講義した。

6. 授業の進め方と特に留意した事柄

・ 受講生は Facebook に登録し、事務的連絡や参加学生同士の情報交換に利用している。
・ 初日の夕食を野外炊飯とすることで、受講学生間の交流を図っている。
・ 大洲青少年交流の家のフィールドを有効に使うため、TA の学生たちと下見を含めた事前準備を綿

密に行っている。

・ 教室での講義と野外活動を交互に行うことで、緊張感を保ちつつネイチャーゲームを体験することができるようにした。

7. 学生の反応

６月に受講希望生を集め、受講者を決定したが、９月１７日の実施日が近づくに連れて医学部生のキャンセルが相次ぎ（当日を含め最終的に医学部生１０名のうち８名がキャンセル)、２４名の受講生が１７名にまで減少してしまった。これにより、グループワークを伴う授業の構成を変更せざるを得なくなり、実施当日までキャンセルが出るたびに何度もプログラムの変更を余儀なくされた。

受講生の反応は例年と同様で、自然を直接体験することにより自然の素晴らしさや面白さを感動とともに感じ取っていた。

8. 到達目標の達成状況

受講した学生たちは、ネイチャーゲームを通して自然に直接触れ、その豊かさを体感した。また、最終日には新しいネイチャーゲームのアクティビティを各グループで創作し、それを実施することでコミュニケーション力も養う事ができた。

9. 今後に向けた展開

毎年抽選を行ない受講生を決定しているが、今回は医学部から参加希望者が殺到した。単なる単位取得目的でなく、やる気のある学生の参加を希望したい。

10. その他（関連資料など）

特になし

科目番号：２０６２４	科目名：地域と世界
担当教員：ルードルフ・ライネルト	
開講時期：後期火曜４限　履修者数：２９名	

共通教育「創生授業」実施報告書

代表教員　所属　教育・学生支援機構
氏名　ルードルフ・ライネルト

1. 授業データ

開講時期　：平成 25 年度　後学期
時間割番号：20624
科目名　　：地域と世界 [Local and Global]
授業題目　：第二外国語/未習外国語を目的言語とする国を愛媛県民・企業などに広めるにはどのようにしますか(How can we inform Ehime and its businesses about countries with other target languages)
履修者数　：29 名

2. 授業の目的

1.始めに、学生は英語以外の外国語（ドイツ語）の初歩を３つの観点（目的語のコミュニケーション、人間情報交換、数字という三つの観点）から学ぶ。
2.学生はその国についての情報等取得方法を学んでから、実際に調査を始める。
3.学生は学んだドイツ語及び調査したドイツについての情報を取捨選択し、それらを愛媛県民及び企業などに紹介する。
4.学生は紹介した結果（反応、手応えなど）を報告書として作成し、フォローアップを試みてから、全体についての簡単な分析を行う。

3. 授業の到達目標

この授業を受けた学生は、未習外国語の初級段階が身につく上、その言語を母国語とするその国の自画像をある程度理解することができる。更に、その国の現代の特徴を知ることで、愛媛県民及び企業にそれらの要点を紹介したり、分析したりすることができる。

4. 共通教育の理念・教育方針に関わる項目（対応する項目をチェックして下さい）

□基本姿勢　■コミュニケーション力　■基本技能　□基礎知識　□基礎的思考力

5. 授業概要

前半：　英語以外の外国語(ここではドイツ語)の初歩の表現を学ぶ：目的語のコミュニケーション、人間情報交換、数字という三つの観点から入って、４技能を使いながら挨拶、紹介、評価、などのドイツ語基礎知識を学び、且つ応用しながら、ドイツの文化を見る。

中盤：　ドイツ語の能力を広げながら、ドイツについての知識を深め、日本に紹介するべき点についての調査方法を学び、それらを愛媛県民･社会に紹介するように準備する。

後半：　具体的に大学と社会の連携を深めるため、県民、企業・法人などにドイツの情報等を学生一人一人が実際に紹介をする。その後、それについての報告を作成する。その報告書についての簡単な分析を行い、日本における外国文化紹介の意義について再考する。

6. 授業の進め方と特に留意した事柄

シラバス（授業案内）と受講生の希望（初回アンケート）の両方に沿うために、次のような流れになった：シラバス　（愛大 HP）－＞初回アンケート（追加１）　－＞　（以下の詳細は報告書（長編）参照）両方に合うように改善　－＞　ドイツ語会話と資料を自主的に探す―＞　ドイツの都市について調べる＞　真の国際体験（よくない面も含めて）―＞　会社など訪問　（記入のために外部**サーバーを用意、**報告書の書き方、評価の仕方）　―＞　報告　(－＞ピアー評価：計画したが実行できなかった)　－＞　ドイツ文法〔一通り、名詞変化１と４格,動詞変化現在、過去分子、過去形のみ〕－＞ドイツにおける簡単な場面＞自己紹介＞（資料無しで）目的言語の母国語話者との会話による口頭試験 2 分　(人数が多いため 2 回にわたって実施)＞筆記(2 回：一回目は Mein Deutsch(私がこのコースで習ったドイツ語の全て)；2 回目は独検 5 級(聞き取りなし)。

7. 学生の反応

－当教員の別な授業を既に一年【理科系４人、人文系 1 人】及び 2 年（人文１人）受けている受講生がいた。

－受講生の 29 人の内、医学部の看護学科、医学科の 15 人であった。医学部にもドイツ語及びドイツに関連する授業の需要がある様に見える。

－隣の人と会話がとれない・とらない学生はいるが、相手を指定すればきちんと練習する場合がある。前期のドイツ語 I などの受講者もおり、ドイツ語におけるレベルの違いが目立ったので、学んだことのある受講生が未習だった受講生を効率よくサポートすることができた。

－自主的に補助教材メディアを使用するのを求めたのはよかった(アンケートから)。

－真の異文化体験（よくない面も含めて）。

－シラバスどおり：愛媛県民及び企業などに紹介する。

－教員とドイツ語で話しだすのが遅い受講生がいた。

－ほとんどの受講生は口頭試験で他のドイツ人とドイツ語で上手く会話することができた。

－週一時間でも教員が用意している授業ファイルを見ない(中間アンケートから)受講生にとっては、授業が難しいと感じるのは当然だと思う。

8. 到達目標の達成状況

目標設定したもの、つまり、口頭試験、訪問、報告書は出来た。また、受講生は Moodle など補助的な教材メディアを目的に合わせて使用することがある程度できたと思われる（ライネルト研究室開発無記名アンケートにより）。

アンケートを見ると、ドイツ語を学んで、文化や習慣に触れても、受講生本人が口頭でドイツ語会話を授業中 4－5 分（試験 2 分）出来ても、(授業について)“あまり満足していない”や（後輩に）“推薦したくない”と答えた受講生がいた。

外国語学習の方法・習い方など様々な事を紹介した結果、(外国語）ドイツ語口頭中心の授業ではないにもかかわらず、受講生は母国話者を相手にして、または後者によって評価を受け、素晴らしい結果を出した。試験では資料を持参せず、ドイツ語で（滞在ドイツ人と）2－3 分話せるようになった(ことをアンケートに言及する受講生もいた)。

授業の一環として計画していたドイツへの旅という宿題は実現しなかった。

会社訪問などに関しての報告についての評価は時間切れで行わなかった。

全体としてみたら。。。

アンケートの自由回答から：戸惑いがあった受講生がいる一方で、授業全体に対して好意的な意見をもった受講生の方が多かった。

Moodle などに対しての反応も、多くの項目について少しずつ良くなった。

9. 今後に向けた展開

－シラバスと受講生の希望の両方に沿うのは難しい。

－できれば受講生同士で助けることを試していく。

－改善点は多くあるものの、レベルや難易度は適切といえるものに近いと言える。(中間アンケートから)

－訳読と訪問（可能か？）のみ、または会話のみ（初回アンケートのように）にしたほうがよさそうに見える。

－文化についての内容は少し増やすべきであろう(初回アンケート及び研究室期末アンケートから)

－受講生の意見では“文化について習う事が出来た。ドイツへの興味を持った”という意見と、“ドイツの地理について習っていない“の極端に分かれる。異なる意見があったので実験的な部分を貫くしかないが、基本（この場合ドイツ語会話）とその様子をみると、少なくとも客観的（実証できる）には肯定的意見を反映した結果と言える。

ライネルト研究室開発無記名アンケートに対し、全体表記に答えた五人はあらゆる面に言及し，良かったという様な意見をあげた。そのため具体的な改善点を決めるのが容易ではない。

10. その他（関連資料など） 詳しい報告または教授法については Long Version（長編)を参考するか教員に問い合わせる：reinelt.rudolf.my@ehime-u.ac.jp

科目番号：２０６２５	科目名：地域と世界
担当教員：田中　寿郎	
開講時期：後期火曜４限　履修者数：２４名	

共通教育「創生授業」実施報告書

代表教員 所属 工学部
氏名 田中 寿郎、ルース・バージン、デイビッド・ボグダン

1. 授業データ

開講時期 ：平成２５年度 後学期
時間割番号：20625
科目名 ：地域と世界
授業題目 ：Challenges and Issues in Research Today (in English)
履修者数 ：24

2. 授業の目的

本授業の目的は、
①英語を用いた講義を提供すること
②英語で考え、議論し、自分の考えを発表する体験をさせること
③教員に、英語で講義する体験をする場を提供すること
④知識を伝達する講義ではなく、学生に自ら考え、議論し、発表させる「アクティブラーニング」のトレーニングの機会を提供すること
などを目的として実施した。

3. 授業の到達目標

You will gain knowledge of what kinds of problems researchers are trying to solve today.
You will be able to increase your English vocabulary.

4. 共通教育の理念・教育方針に関わる項目（対応する項目をチェックして下さい）

☐基本姿勢 ☑コミュニケーション力 ☐基本技能 ☐基礎知識 ☑基礎的思考力

5. 授業概要

This will be an omnibus-style class held in English with a different professor from a different field teaching one class each. Students will be introduced to the current challenges and issues in the fields of science, agriculture, engineering, language, political science and economics.

6. 授業の進め方と特に留意した事柄

講義の進め方
①オムニバス形式であるので、講義１ 週間前までに担当教員に Prep-sheet を作成してもらう。

ここには、授業の概要、授業までに調べておくこと、考えておくこと、議論すべき点を明記
②このPrep-sheet をMoodle を使って、学生に提示する。
③学生はPrep-sheet を予習に使い、Moodle 上のForum で、あらかじめ与えられたテーマについて学生や担当教員と議論し、講義までの1 週間の間で理解を深めておく。
④講義当日は約40 分の講義と40 分の議論やワークショップを行い、講義の内容について、より深い理解を目指す。
⑤講義後、授業についてアンケートに記入する。
⑥授業の中間と期末に、それぞれ印象に残った講義を一つ選び、内容などについてレポート（英文）を作成する。

7. 学生の反応

今年度は、学生数を24名に抑えたので、学生同士の交流も意欲も高くなり、英語で講義をする初期の目的を達成できた。学生の本講義に対する感想も好意的であった。その理由は、①英語を始めて知識や自己主張の道具として使う経験ができたことに対する満足感、②毎回行われる英語を用いた議論やワークシップにより、自ら講義に参加しているという充実感、等が、好意的な意見が多い原因であると推察される。